

サバナナ

高橋 幹子

○大垣家・外観（夜）

『大垣写真店』の看板。

○同・居間（夜）

乾杯をしている大垣裕也（34）、大垣長雄（60）、大垣春子（55）。

長雄「そうか、ついに決めたか」

春子「お父ちゃん、ずっと夢だったんだから。

あんたのアレここに飾ること」

居間から見える店先には、長雄が撮った

七五三や成人式、自然の写真の他、何十

組もの『新郎新婦』の写真が飾ってある。

長雄「（苦笑）随分練習したからな」

春子「五十組よ、五十組。最後はビシッと

あんたに決めてもらわないと」

裕也「最後？」

長雄「ああ、店を畳むことにした」

裕也「！」

長雄「こんな小さな町じゃ経営はきついしな。

もう撮るものもないだろ」

春子「お父ちゃん、あんたが結婚するまでは

頑張るって決めてたから」

裕也「……」

と、裕也、何かを決心したように自分の

グラスになみなみと酒を注ぐ。

裕也「もう一回、乾杯しようぜ」

長雄・春子「？」

裕也「引っ越してくるよ」

長雄「！」

裕也「実は彼女にも言っているんだ。“写真屋

の嫁になるのは嫌か？”って」

春子「！裕也……」

裕也「予定よりちよつと早かったけどな（笑）」

息子の意外な申し出に喜ぶ長雄。

照れくさそうに酒をつぐ裕也。

○同・居間（夜）

シンと寝静まった室内。
居間には、空の一升瓶が転がっている。
壁には、草原や海、空などの風景写真。
月明かりに浮かび、幻想的な空間を醸し
出している。

その下には、裕也を中心に家族の遍歴を
表す写真が幾つも飾られている。

幼少期、小中高大学時代、そして社会人。
それを一枚一枚見ている「男」。

ふと、ある写真の前で足を止める。

それは、若い女性の写真で。

男「(憎々しげに見据え)……」

と、そこに裕也がやって来る。

裕也「何だよ、親父。まだ起きてたのかー……」

瞬間、鉦を振り下ろす男……。

今までの歴史を消すかのように大量の
血しぶきが写真に飛び散る……。

○東京全景――

○議員会館・裏口

表に待ち構える大勢の記者。

一人、裏で待ち伏せしている松永雅文
(35)。

表から議員の戸田登(67)が出て来る。

ワツと囲む記者ら。

記者1「戸田議員！川北町に建設した産業廃棄
物処理施設について一言！」

記者2「業者との癒着が噂されていますが？」

が、微動だにしない松永。

暫くして、裏口から秘書が出て来る。

と、ポケットから小さな貝殻を取り出し、
秘書に近付き渡す松永。

松永「これを戸田議員に渡してくれませんか」

秘書「？」

松永「議員の地元で取れるアサリです。ただ
こう小さいと今までのようにうまい味噌汁
ができるかどうか。何が原因ですかねえ」

秘書「……」

松永「ぜひ感想を伺いたないので、どうにかお時

間を取って貰えませんか？私、“週刊次代”の松永と申しますが」

名刺を渡す松永。そこには、『週刊次代記者 松永雅文』の文字。

掌にのった貝殻は通常より一回り小さい。明らかに産業廃棄物により汚染された『証拠』のように見える。

秘書、嫌そうに貝殻を受け取りながら車に乗り込む。

記者らがまだ追い掛ける中、一人、鼻歌を歌いながら帰ろうとする松永。

と、携帯電話が鳴る。『実家』から。

(以下、実家・絹子(65)とカットバック)

松永「(面倒臭そうに) 何だよ？」

絹子「何だよじゃないわよ。あんた宛てに手紙が届いてるのよ、東京のマンションに送ろうか」

松永「どうせダイレクトメールかなんかだろ、捨てていてくれ」

絹子「違うわよ。過去の自分から」

松永「は？」

絹子「拝啓松永雅文様。松永雅文より」

松永「……ついにボケたか」

絹子「違うわよ！あんたこそ覚えてないの？タイムカプセルよ、タイムカプセル」

松永「タイムカプセル？」

絹子「二十年前に、町立三十周年記念で書いたじゃない。“二十年後の自分へ”って。それが先日、掘り起こされて送られてきたのよ。どうする？捨てようか」

松永「いや、取っておいてくれ。そのうち帰るから」

絹子「そう言いながら、あんたもう何年も帰ってこないじゃない」

松永「今度こそ帰るよ。話があるんだ」

絹子「話？話って何よ。ちよつと雅文！」

面倒くさそうにブツツと切る松永。

と、すぐまた電話が鳴る。

松永「だから何だよ！忙しいんだよ、こっちは」

上地の声「そりやすまなかつた」
松永「デ、デスク！申し訳ございません」

受話器を持ち替える松永。

(以下、編集部・上地晃(42)とのカットバックで)

上地「婚約者とケンカでもしたか」

松永「いえ。ちよつと実家から電話で」

上地「じゃあ聞いたか」

松永「？いえ何も」

上地「だったら今すぐ実家に帰れ」

松永「は？な、何言ってるんですか？戸田の汚職事件、これはスクープですよ!?やつと罍をしかけたのにこれを逃したらー…」

上地「―新潟県碧辺町」

松永「?…:は自分の故郷ですが」

上地「そこで殺人事件が起こった」

松永「！」

上地「被害者容疑者共にお前の二つ下。おそろく知ってる奴だろう」

松永「…:」

上地「どこよりも突っ込んだ事を書け。期待してるぞ」

松永「…:!!」

○松永のマンション・リビング

鞆に荷物を詰めている松永。

顔を出す宮前ユリ(28)。

ユリ「これ、電車の中で(おにぎりを渡す)」

松永「(すまなそうに) 悪かったな。挨拶、延期になっちまって」

ユリ「五回目だからもう慣れた」

松永「六回目だろ」

苦笑し合う二人。

と、テレビに殺人事件の速報が流れる。手を止め、見入る松永。

ユリ、隣りに座り準備を手伝いながら、ユリ「雅文の地元？」

松永「ああ。家から車で十分くらいのことだ。解決したら今度こそ挨拶に連れてくよ。見ての通り何にもない田舎だけど」

ユリ「何にもなくはないわ。雅文を生んでくれたご両親がいる。雅文の大事な原点よ」

松永「……ユリ」

ユリを抱き締める松永。

コトンと頭を寄せるユリ。

○走る新幹線・中

眠っている松永。

ハッと目を覚まし、慌てて外を見ると、田園風景の向こうに小さく海が見える。車内の電光掲示板には、『次の停車駅は新潟県棚辺駅』の文字。

慌てておにぎりを取り出す松永。

松永「（が、ふと手を止め）……」

目を細め、少し懐かしそうに故郷の景色を見つめる松永……。

○駅前のロータリーと道路

タクシーに乗り込む松永。

行き先を告げようとすると、

運転手「警察署？」

松永「！」

運転手「長年この仕事していると何となく職業がわかるようになったら。記者でしょ、あんたどっか一流の」

松永「（苦笑し）三流ですよ、グラフィア専門の（と、『週刊次代』を取り出し見せる）」

広い道路を走り出す車。

松永、寂れた町を目にしながら、

松永「もしかして僕以外にも誰か来ました？」

運転手「ああ、局のレポーターと弁護士。嫌なもんだな。商売が繁盛してもこんなことで町が有名になるのは」

松永「……」

見渡す限り山と海に囲まれた小さな町。

見慣れた景色が松永の目に映る。

その景色に目をやりながら、事件のことを思い出す松永。

松永「人口六千人。海辺の静かな新潟県碧辺町。古くから海と山の幸に恵まれた三陸沖

「俺の故郷だ」

「楽しそうに歩いている学生らの姿が目に入る。」

松永N「被害者は、町で唯一の写真館を営む店主・大垣長雄（60）と、その息子・裕也（34）。寝室に身を潜めていた妻の春子が110番し、事件は発覚。現場に辿り着いた警察官は、まずはその大量の血に愕然としたという。長雄の死因は脳挫傷。裕也は全身殴打によるショック死だが、長雄と決定的に違うのは判別がつかないほど殴られた顔。大阪に住む裕也が帰省したのを見計らって犯行が行われたことから、「怨恨」の可能性が非常に高い」

『碧辺町立碧辺中学校』の脇を通る。

二十年前と変わらない古い校舎。

グラウンドを走るジャージ姿の生徒。

『陸上部全国大会出場校』の垂れ幕。

松永N「……容疑者は瀬戸健（34）。近くの砂防林で蹲っていたところを県警に逮捕される。裕也とは中学の同級生であり遠縁。高校を卒業後、上京するが数年で勤め先を退職、その後は田舎に戻り派遣社員として職を転々とし、現在は無職……」

寂れた商店街を歩く親子連れの姿。

松永、ふつとその親子に健を重ね、

松永N「幼い頃に父親を病気で亡くした健は、母親と二人暮らし。家が近所の裕也とは仲が良く、小中あわせて九年間、一緒に通学したという。が、中学を卒業後、二人は自然と離れていく。裕也は進学校へ、瀬戸は工業高校へ。今やマネージャーに昇進し仕事が順調な裕也と、片や無職の男ではいつからか眺める景色も違ったことだろう。嫉妬心から芽生えた殺意なのかそれとも何か別の事情があったのか……」

○新潟県棚辺市警察署・外観

○同・応接室

殴打された裕也のスプラッタのような

死体写真。

を、見ている松永。

警官の阿部信（33）がドアの隙間から心配そうに廊下を伺っている。

阿部「（小声で）先輩！そんな堂々と見ないで下さいよ。部外秘なんですから」

松永「で、どんな奴だよ？鼻にピアス開けてるとか髪が金髪とかクスリやっているとか」

阿部「真逆ですよ、真逆。とても人を殺すようには見えない」

松永「へえ、会うのが楽しみだ（と、煙草を吸いだす）」

阿部「会えませんが！（バツと煙草を奪い）」

松永「容疑者も大筋犯行を認めてんだろ？凶器の鉋も砂防林から発見したって言うじゃないか。だったら面会してもいいだろ？」

夕刊で阿部の頭を小突く松永。

そこには、『容疑者は大筋犯行を認めており、供述にも素直に応じている』との記事。

それでも阿部が躊躇していると、

松永「佐藤商店、潰れたらしいな」

阿部「!？」

松永「お前らが昔バイトした海の家だよ。バイトという名目で潜り込み、仲間に万引きを繰り返させていたあの店が遂に潰れたんだ。あの万引きシステムを生み出したのはお前だろ？あれがきっかけであの店は……」

阿部「先輩、勘弁して下さいよ。そんなの中学の時の話じゃないですか。潰れたってのもどうせハッターリでしょ？知ってるんですよ。先輩がハッターリの名人だったこと」

松永「……」

阿部「こっちはハッターリじゃないんです。ほらここにも書いてある。面会が可能なのは家族や友人、知人……」

松永「（説明書を指し）“知人”」

阿部「は？」

松永「中学の部活の後輩だから知人だろ？」

阿部「（呆れ）そんなの本人が拒否するに決ま

松永「あいつとも全く会ってないな。なにせ五年ぶりだから、この町に戻って来たのは」

瀬戸「……」

松永「君とも二十年ぶりだ。聞かせてくれないか？」

やや落ち着きのない様子を見せ始める

瀬戸。松永、それを目の端に捉えながら、

松永「俺には君が人を殺すようには見えない。

だけどツツチーが気になることを言ってた

んだよ。“あいつはいつか殺ると思ってた”

瀬戸「！」

動揺したように顔色を変える瀬戸。

松永「顧問からは一体お前がどんな風に見えてたんだろうな？」

慌てて記録の手を止める阿部。

何かを読み取るようにじっと表情を見

つめる松永――

× × × ×

松永を裏口に連れて行く阿部。

阿部「先輩！やめて下さいよ、被疑者を動揺させるのは！」

松永「動揺しなきゃ本当のことなんて話さないだろ」

阿部「あんな嘘までついて。何すか、ツツチーって。二十年ぶりに聞きましたよ」

松永「槌田は今、交通刑務所にいる、それは本当だ」

阿部「！め……面会に行ったってのは？」

松永「は？行くわけないだろ、何で行くんだよ」

阿部「はあ!?!じ……じゃあ、あれも嘘ですか？いつか殺ると思ってたって言うのも」

松永「別に誰でも良かったんだよ、ああ言った時のあいつの“顔”が見たかったんだ」

阿部「さ……最低じゃないですか」

松永「どつちが？自白したことに安心してそれ以上追及しない警察よりむしろ？佐藤商店の話は本当だからな。悪いと思うなら全力

で仕事に取り組めよ、三分の一じゃなく」

阿部「……」

○松永家・外観（夜）

『松永聡・絹子・雅文・奈桜』の表札。

○同・玄関くりビング（夜）

帰って来る松永。

リビングに行くのと、松永聡（68）と松

永絹子（65）が驚いた顔で振り向く。

松永「……何だよ」

絹子「またこの子は予告もなしに突然……」

聡「（苦笑し）五年前もそうだったな」

と、松永の背後を執拗に覗き込む絹子。

松永「何？」

絹子「いや、てつきり話があるって言ってたから嫁さんでも連れてくるのかと思ってね」

松永「その予定だったんだけどさ」

絹子「まさか振られたの!？」

松永「何でそう話が飛躍すんだよ」

どっかと疲れたように椅子に座る松永。

聡「……そうか、あっちの件で来たのか」

松永「まあね」

× × ×

× × ×

魚介鍋を食べてる3人。

松永「へえ、じゃ本当にいい息子だったんだ」

絹子「そうよ。明るくてハキハキして（土産を開けて）。あらこれ、小川軒のレーズンウイ

ツチ！センスいいわねえ、あんたの彼女。お返しにアサリでも送ってやろうかしら？」

松永「“廃棄用”じゃなく贈答用な」

絹子「何よ、あれはあんたが送れって言ったんじゃない。小さければ小さい程いって。母

さんわざわざ市場に行つて貰ってきたんだから。一体何に使つたのよ？」

松永「……（答えず）奈桜は？」

絹子「海外。今度はアメリカ」

松永「（呆れ）何だ、まだ就職してないのかよ」

絹子「いいじゃない。女の子は嫁に行っちゃえばチャラなもの」

松永「家庭に納まるタイプかよ、あいつが」

絹子「でもよく男友達と遊びに行つてるみたいよ？あゝ残念。雅文の彼女が見たかったわ」

聡「—お前こそ覚えてないのか」

松永「え？」

聡「さっきの話。学年一コ下だろ。被害者」
箸を置く松永。

松永「……ああ、あんまりハッキリとは。茶髪
で生意気だったっていう印象はあるけど」

絹子「何言ってるんの、あんたも茶髪だったくせ
に。母さん、時々あそこの写真屋に現像しに
行くんだけど、あの息子さんたまに帰ってき
てね、親切に対応してくれたわよ」

松永「へえ」

聡「確か大阪の方でも、少年スポーツのコーチ
をやってるって聞いたな」

松永「ふーん。で、容疑者の方は？」

顔を見合わせる聡と絹子。

松永「……何だよ？」

絹子「それがさっぱり記憶にないのよ。あんた
こそ陸上部で一緒だったんでしょ？」

松永「……」

絹子「ほれみろ」

松永「つうか、下級生なんて誰が覚えてるかよ。

むしろ被害者を覚えてたのが特別だ。なにせ
町に一軒しかない写真屋の息子だからな」

聡「そうだな。町の子どもは皆、あそこのご主
人に撮ってもらったからな。入学式も運動会
も卒業式も全部」

松永の目に、テレビの下に無造作に積ま
れた中学時代のアルバムが映る。

絹子「それにしても恐いわねえ。寝てた時、突
然ですって。鉈でこうよ、こう」

聡「奥さん、ショックで入院してるって話だ
ろ？気の毒だな……」

松永「……」

○同・松永の部屋・中（夜）

寝転がりアルバムを見ている松永。

表紙には『碧辺町立碧辺中学校』の文字。

捲ると、詰襟を着た幼い松永がいる。

松永「なっつかし……」

同級生らの顔を目で追う松永。

合唱コンクール、運動会、文化祭など。
松永「(ふと中学時代を思い出し)……」

× × ×

○(松永の回想) 碧辺町立碧辺中学校・校舎前
『碧辺中学校第三十期生卒業式』の看板。
手には卒業証書、胸に花をつけ、集合写
真を撮られている松永(15)ら。
フアインダーを覗くのは長雄(40)。

長雄「……一人、足りないな」

三分一「吉田さんがまだでくす」

クスクス起きる笑い声。

長雄「ほらそこ！動かない！」

三分一「いやん、待って、今脱いでるの」

三分一裕樹(15)の女声に、どつと笑
いが起こる。

瞬間、フアインダーをきる長雄。

× × ×

最後の頁を開く松永。

その時の写真が載っている。

皆、笑顔で写っている。

下には小さく『撮影 大垣長雄』の文字。

松永「二学年百二十人だとして……設立が四十

年前で……四千八百人……まさか被写体の

一人に殺されるとは思わなかっただろうな」

ふと机の上に置いてある、昔、自分が書

いたタイムカプセルの手紙が目に入る。

拙い字で『松永雅文様』と書いてある。

手に取り、読み始める松永。

松永「汚ったねえ字……何々？“僕は二十年後も

まだジャンプを読んでいますか？”くせ毛は治

っていますか……って何だよ、冒頭からこのく

だらないメッセージ(苦笑)」

苦笑し、最後まで読まず放り投げる松永。

松永「つとに、何でこんな平和な町で……」

○碧辺町立碧辺中学校・職員室・中

教師1「ありましたよ、こちらです」

色あせたアルバムと文集を松永に渡す

教師1、2。

アルバムをめくる松永。

笑顔の裕也（15）が映っている。
瀬戸（15）は上の方にポツンと丸写真のみ。

他の頁も、至るところに活躍する裕也の写真はあるが、瀬尾の写真はない。

松永「……間違いない、か」

テーブルに広げた朝刊を見る松永。

そこには、『動機は過去の“苛め”が原因』との記事。

教師1「……苛めねえ」

松永「何ですか？」

教師1「いや、当時の担任にも確認したんですが、そんなひどいことはなかったようですよ？確かに大垣は多少は悪ガキだったようですが……」

教師1、新聞に書かれた『容疑者はネットの掲示板だけが抛り所だった』の見出しに目をやりながら、

教師2「凶器もネットで購入したそうですし、警察にも話したんですが、瀬戸は当時から、やたらマニアックな本ばかり図書室から借りていたようで。機械学とか兵器工学とか」

教師1「いわゆるオタクというか引きこもりだったんでしょね。最近多いですね」

教師2「人間、仕事してないと要らぬことばかり考えてしまいますからねえ」

松永「……」

文集を開く松永。

そこには、『将来の夢』と題した作文が。

『将来は、父の後を継ぐ』と熱き想いを一頁にわたって書いている大垣。

対照的に、『将来なんか考えたことがない』とほんの数行のみの瀬戸。

明らかにやる気がない。

教師2「大体、二十年前の苛めが原因って本当なんでしょうかねえ」

松永「え？」

教師2「人間、そんなに過去のことについてまでも執着しないでしょ？仕事とか人生とかもつと別の悩みが出て来ますよ。何か他の悩

みがあつたんじゃないですか？」
松永「……」

○碧辺町立碧辺第一小学校・校門前
出て来る松永。

松永「(頭を掻き)ここも収穫なし、か……」

○瀬戸家・瀬戸の部屋・中

自宅捜査中の捜査員ら。

パソコンを調べたり、本を捲ったり、引き出しを開けたりしている。

捜査員1「ダメです。復元出来ません。履歴もファイルも全部消されてますね」

捜査員2「同じく手紙も日記もありません」

刑事「参ったな。本人が幾ら自白しても裏が取れなきゃ……」

と、ふと畳に目がいく。

そこには剥げた箇所が。

それはちょうど『足形』にも見える。

刑事「おい、ちよつと立ってみろ」

言われた通り、剥げた部分に足を合わせ、立ってみる捜査員1。

と、そこからカーテンを開けると、その先には、『大垣写真店』が見え……。

刑事「!……」

○瀬戸家の周辺

慌しく帰って行くパトカー。

主婦1「ちよつとお!聞いているの?」

松永「もちろんです。昼間に姿を見たことはないと(慌ててメモに目を落とす)」

主婦らに聞き込みをしている松永。

主婦2「夜もよ夜も。いつもぼわーんと二階が青白く光るの。あれきつとパソコンの光よ」

数軒先には、カーテンを閉めきつた瀬戸の部屋が見える。

松永「あの……一人は大人になってから本当に一度も交流がなかったんでしょうか?」

主婦2「親戚だから法事や結婚式で時々は会ってたんじゃない?」

松永「となると年に一〜二回ですかね」

主婦1「おたく大学出？」

松永「え？ええ」

主婦1「そういうのが嫌だったんじゃない？親

戚の集まりで比較されたりすることが」

主婦2「同じ年だといろいろねえ」

松永「気にするようなタイプだったんですか」

主婦1「そりゃ大垣さんの方はね。自営業を営

むくらいだもの。気は強かったわよ」

主婦2「瀬戸さんの奥さんは真逆ね。静かな方

で。でも私、驚いちゃった。こんなことがあ

ったのにまだ気丈にもパートを続けてるの

よ」

松永「パート？」

主婦2「隣り町の××マート」

主婦1「でもあなた、取材に行っちゃダメよ。

彼女、今仕事を辞めるわけにいかないんだか

ら。だけど度胸座ってるわね〜私には無理」

松永「…：大垣裕也はどんな人物でしたか？」

主婦1「負けず嫌い」

松永「！」

主婦1「とにかく話の中心にいたがる子だった

わね。うちの子に、俺は絶対写真屋なんか継

がないって豪語してたもの」

松永「ですが、作文には父の跡を継ぎたいと」

主婦1「そんなの、点数稼ぎよ、点数稼ぎ」

主婦2「でもほら、女の子連れてくるようにな

ってから感じが変わったわよね」

主婦1「！あら知らない。誰よそれ？」

主婦2「私だって詳しくは。だけど裕也君、あ

の子を連れてきてからちよっと感じが変わ

ったというか、優しくなったというか」

主婦1「だから誰よ、それ」

主婦2「ほら、あれよあれよ。写真屋の店頭に飾

ってる写真があるじゃない。あの子よ」

松永「！」

○松永家・松永の部屋（夜）

原稿を書いている松永。

新聞には、『小中学校の苛めが原因』の

見出し。

別の新聞には、『無職男の妄想劇』『ひきこもり幼馴染がエリート社員をメッタ刺し』など、瀬戸を批判するものばかり。記事の扱いが小さくなりだした新聞も目立つ。

そんな中、松永の目は自然と、『戸田議員汚職か!』の大きな見出しに向く。

松永「……」

記事から目を反らし、デジカメを取り出す松永。

画像を一枚一枚見ていく。

シャッターが閉まった大垣写真店。

窓ガラスに貼られた、町民の七五三や成人式などの写真。

そして、一人の『若い女性』の写真――。

松永「(見つめ)……」

電話をする松永。

(以下、編集部とカットバックで)

上地「おう、松永か」

松永「一面トップですね。戸田の汚職疑惑」

上地「焦るな。次はお前だ」

松永「ただ事件は終息に向かってます。もはや小さく扱ってる新聞もある中、追う意味があるのかどうか――」

上地「それを作るのがお前の仕事だろ」

松永「ですが……」

上地「犯人はあつさり自供、裏付け捜査は間もなく終了。順調すぎると思わないか？」

松永「……」

上地「苛めが原因の復讐劇なんてどこにでもあ。他紙と同じような記事しか書けないようだったら帰ってこい」

松永「……」

上地「いいか？遠慮なんかするな。お前はどうぞ故郷を捨てた人間だ。閉鎖された田舎で何が起きたか突き止めてこい。わかったな」

松永「……はい」

電話を切る松永。ベッドに横になる。

と、電話が鳴る。『阿部』からだ。

松永「(面倒臭そうに) 何だよ？ 容疑者が会う
気にもなつたか？」

阿部「ありえないでしょ、あんな脅ししておい
て。違いますよ、連絡がついたんです」

松永「連絡？」

阿部「瀬戸や大垣の同級生です。大変だったん
ですから、皆、方々に散らばってー…」

松永「(ガバツと起き) 明日の十時。棚辺の喫
茶店に集合。わかったな？」

阿部「ちよっ…！先輩!？」

○喫茶店・中

店の奥で木村(34)とその子供(2)、
加藤(34)、梅宮(34)、と対面してい
る松永。

松永「で、お前ら、仲良いふりしてどんな苛め
をしたんだよ？」

顔を見合わせる三人。

木村「苛めっていうか…プロレスごっこし
たりからかったり」

松永「(メニユーを奪い) 嘘を言うな、嘘を。
この女のことも知らない(デジカメを見せ)、
苛めもしてない、それじゃ割合わねえつ
の」

木村「何すか！ 子供にも飯食わせてくれるか
ら来たのに」

ちらりと三人の左手薬指を見る松永。

指輪をつけている二人。

仕方なしに料理を注文する松永。

加藤「…大体、何で俺まで呼ばれるんすか？
そりゃ、裕也とは仲良かったすけど、瀬戸と
はほとんど口を聞いたこともないのに」

松永「それだな。孤独がああな犯行にからせた」
加藤「(呆れ) 松永さんだってそれくらいのこと
としたでしょう？」

松永「だから聞いてるんだよ！ たかがそれぐら
いのことでは人は二十年も復讐心を募らせる
かって」

梅宮「…募らせる人間は、募らせるんじゃない
いですか？」

松永「あ？」

今まで口を開かなかった梅宮が、俯いたままポツリと話し始める。

梅宮「さっきの話ですよ。苛めた方が忘れても、苛められた方は忘れないってよく言うじゃないですか」

松永「……へえ。お前、苛めた側だよな」

梅宮「どつちも経験しましたよ。むしろそういう人の方が多いいんじゃないですか？」

松永「……」

梅宮「強い者には逆らわない、うまくやりぬける。皆、そうやって少しずつ学習していくんです。その学習能力があいつは低かった、それだけの話じゃないんですか？俺だってまともな人間関係を築けたのは、社会人になつてからですよ。あんな思春期の精神未熟な人間を閉じ込めた箱の中でうまくやれる奴なんて早々いない、そう思いますけど」

松永「……」

○走る車

考えた顔で運転してる松永。

と、電話が入る。

『阿部』からだ。

松永「お前、ピザ以外は自腹だぞ」

阿部「(慌てて飲み込み)ま、待って下さい」

(以下、さっきの喫茶店とのカットバックで)

観葉植物に隠れて座っている阿部。

梅宮らが座るテーブルの方に、携帯電話を向ける。

松永「(車を止め、聞き入る)……」

多田「だけど、お前の言う通りだな。ああ言ったらすぐ帰った」

梅宮「だろ？ああいうインテリにはそれらしいこと言つときゃ納得するんだよ。取材だつて受けておいた方が、後々いいんだって」

加藤「でもやっぱ原因はあれだよな？」

梅宮「これだろ？」

どつと沸く三人。

松永「……？」

梅宮「俺は瀬戸に同情するね。あの変態野郎。回りにバレねえよう、絶対通学中にやらせてたからな。どんだけ用意周到なんだよ」

多田「よく言うよ、見張り役だったくせに」

梅宮「だから言ったろ？うまく生きてくためには強い奴に巻かれる必要があるって。じゃなきゃ誰が好んで見張りなんかするかよ。しかも何で今さらそのことで、頭を悩ませなきゃなんねえんだよ」

吐き捨てるように言う梅宮。

松永「……阿部、何が原因だった？」

阿部「(動揺) え、あの……」

梅宮たちを真似て、ウインナーをペロペロと舌で舐める子ども。

どつと笑う三人。

松永「(驚愕し) ……！」

○集談社・外観

○同・『週刊次代』編集部

険しい顔で新聞を読んでいる上地晃
(42)。

苛々したように各紙を捲るが、どの新聞も、あの事件のことは扱ってない。たまにあっても、ほんの小さくだ。

上地「……」

編集部員「デスク。一番松永からです」

受話器を取る上地。

上地「おう、どうした」

松永「(興奮気味に) 裏付け取れました。原稿を書き次第、すぐ送りますから！」

上地「……おう。期待してるぞ」

電話を切る上地。編集部員が、

編集部員「紙面、空けときますか？今ならまだ見開きでー……」

上地「いや」

編集部員「え？」

上地「何」

編集部員「あ、いえ、別に……」

再び新聞に目を落とす上地。
上地「(険しい表情で新聞を見つめ) ……」

○松永家・松永の部屋(夜)

意気揚々と記事を書いている松永。
画面には、『性的苛めが原因。変態男に
悩まされ続けた地獄の二十年』の見出し。
家の電話が鳴る。

(以下、外国にいる奈桜(32)とのカッ
トバックで)

松永「もしもし?松永ですが」

奈桜「げ」

松永「!…:奈桜?」

奈桜「何で、あんたが出るのよ」

松永「家に帰っちゃ悪いのかよ」

奈桜「母さんは?もしくは父さん」

松永「どっちも出掛けてるよ」

奈桜「…:困ったな」

松永「何だよ」

奈桜「兄貴には関係ないわよ。じゃあね」

松永「風邪か?」

奈桜「!」

松永「お前、声がおかしいぞ。どうした?もし

かして泣いてるのか?」

奈桜「…:親友が亡くなったのよ」

松永「…:!!」

奈桜「明日、通夜なんだけど、飛行機のチケット

トが取れなくて…:」

松永「わかつたよ、代わりに出るから。どこに

行けばいい?(とメモを取り出す)」

奈桜「…:東原の吉田拓実。知ってる?」

松永「いや。母さんに聞けばわかるだろ」

奈桜「悪い」

電話を切る松永。

と、春子が顔を出す。

春子「奈桜から?」

松永「親友が亡くなったって。喪服あるかな」

春子「まあ…:事故かしら?」

松永「さあ、そこまでは。この家なんだけど」

メモを渡す松永。

春子「―同級生よ」

松永「だろうな」

春子「じゃなくてあんたの同級生」

松永「は？」

春子「吉田さんて、ほら一時期、登校拒否にな
った……」

松永「―：：：!?」

○吉田家・通夜会場・中（翌日の夜）

『故吉田拓実 葬儀式場』の看板。

喪服姿で受付を済ませる松永。

表札を見ると、『吉田麻美・宏美・拓実』。

松永「……」

居間上がる松永。

が、参列者はほとんどいない。

親戚の視線を感じながら手短に焼香を
済ませる松永。

俯いたままの吉田麻美（60）と吉田宏
美（35）の前に立つ。

松永「ご愁傷さまです。妹の代理で来ました松
永と申します」

麻美・宏美「……」

松永「拓実さんとは中学からの親友で……」

麻美・宏美「……」

松永「あの……妹が帰国しましたら改めて伺い
ますので……（頭を下げる）」

麻美・宏美「（頭を下げる）……」

松永「……」

○同・外（夜）

吉田家を出る松永。

見ると、まだ麻美と宏美は俯いたままで
ある。

松永、虚ろな目をした宏美を見やり、
松永「……変わってねえな」

と、親戚1、2が玄関から出てくる。

親戚1「やっぱりお姉ちゃんが原因らしいよ」

親戚2「あれだろ。宗教を苦にしての自殺」

松永「……!?」

カチツ、カチツ、ライターの火がつか

ない親戚1。

親戚1「でもまさか自殺なんて」

親戚2「弟さんだけが頼りだったのに。どうするのかしら？これからこの家は」

と、暗闇にポツと灯る火。

ライターを差し出す松永。

松永「あの、宗教が原因で自殺って……？」

親戚1「あら嫌だ！聞こえてたなんて。あなたどちらさま？」

松永「同級生ですー拓実君の」

咄嗟に嘘をつく松永。

親戚2「まあ、それはわざわざ」

親戚2「ここだけの話。火のお礼ね」

と、声を潜め、周囲を伺いながら話し始める親戚2。

親戚2「あそこにほら、お姉さんがいるじゃない」

松永「ええ」

親戚2「宏美ちゃんて言うんだけど、中学の時の苛めがきっかけで宗教にはまったのよ」

松永「！」

親戚1「もうそれから家の中がひっちゃかめっちゃかで。変な壺は買うわ、拓実君が働いてきたお金を全部つぎ込むわ。拓実君、それを苦にしてコレよ、コレ（と、首を吊った真似をする）」

松永「……！」

親戚2「麻美さんがもう少ししつかりしてれば良かったんだけど、娘さんの苛めが原因で少しここがね（と、心臓を押さえる）」

松永「心臓ですか？」

親戚2「（頭を振り）ノイローゼ」

松永「……！」

親戚1「前はあんな家族じゃなかったんだけど。父親がいなくても、皆、明るくて仲良しでさ」
親戚2「あたし覚えてるわ。宏美ちゃんが中学二年生の時、あたしにこう聞いてきたの。『おばちゃん、あたし臭い？』って」

松永「！」

親戚2「そりゃね、父親がない分、決して豊

かな暮らしじゃなかったけど、そんな臭うわけないじゃない。けどほら、クラスの男子に“臭い”って囃したてられたって……」
松永「……！」

○（松永の回想）碧辺町立碧辺中学校・教室
クラス……。

クラスメイトから笑われている宏美
(13)。

宏美「悔しそうにじっと耐え）……」

教室の一番後ろには、三分一や松永らが、ニヤニヤ宏美を見ている。

三分一「何か臭くねえ？」

松永「高志、窓開けるよ、窓」

男子生徒1が、窓を開ける。

三分一「やっべ、俺、喉痛くなってきた」

松永「植竹、ジュース買ってきて、ジュース」

三分一「そうだぞ。カケに負けたんだから」

植竹「いや、だって普通は二日が限界でしょ」

三分一「だったら本人に聞けよ。何で三日前のカレーのシミ、まだつけてるんですか〜って」

宏美のブラウスには、黄色い給食のカレーのシミがついている。

それを賭けの対象にされていたのだ。

宏美「（悔しそう）……」

× × ×

○（回想終わり）元の吉田家・外（夜）

親戚2の声「大丈夫？ 顔色悪いけど」

松永「（ハッと）……し、失礼します」

そそくさと会場を後にする松永。

その顔には冷や汗が浮かんでおり……。

○松永家・松永の部屋（翌日の夜）

カチツカチツ。

煙草に火をつけようとしている松永。

が、焦ってうまく点けられない。

松永「（舌打ち）何で今さら……っ！」

床に置きっ放しのアルバムが目に入る。
集合写真には、上の方に丸写真でポツン

と映ってる宏美の姿が。

× × ×

○（松永の回想）碧辺町立碧辺中学校・校舎前
どんより曇った雨空。

『碧辺中学校第三十期生卒業式』の看板。
卒業証書を片手に、胸に花をつけた松永
らが記念写真を撮っている。

と、フアインダーにポツ……と雨が滴る。
顔を上げる長雄。

長雄「（雨雲を見上げ）……一人、足りないな」
三分一「吉田さんです」

クスクス笑いが起こる。

長雄「君、悪いけど、あの髪の毛の長い女の子、吉
田さん、呼んできてくれないかな」

松永「休みですけど」

長雄「卒業式に？」

松永「はい」

長雄「卒業式に？」

松永「（ムツ）はい」

長雄「（と、生徒を見て）ほらそこ！動かない」
三分一「いやん。今、脱いでるの。焦らないで」

どっと笑いが起こる。

瞬間、シャッターを切る長雄。

長雄「つたく、このクラスは……」

機材を片付けながらブツブツ言う長雄。

と、三分一、ムツとしてる松永に気付く、

三分一「何？どうしたんだよ」

松永「ムカつくな。あのオヤジ」

三分一「（楽しそうに）やっちゃおう？卒業記念
にやっちゃおう？」

松永「お前が言うのと冗談に聞こえねえな」

三分一「それより俺、もつといいコト思いつい
ちやった。これ、持ってこーぜ。吉田ン家に」

宏美の卒業証書の筒を見せる三分一。

松永「冗談」

三分一「まじで。で、そっからが面白い……」

と、奈桜（12）がやって来る。

奈桜「お兄ちゃん」

松永「げ。何だよ、あいつ」

見ると、聡と絹子もいる。

松永「何で家族総出なんだよ。悪い、卒業パーティーには顔出すから」

三分一「え〜つまんね〜松永ちやあん！せつかくの恵の雨なのにく〜？」

が、奈桜がやって来たことが恥ずかしく、降り出した雨の中、一目散に家族の元に駆け寄る松永―。

× × ×

○（回想終わり）元の部屋・中（夜）

松永「何だよ、今頃……！」

アルバムを苛立たしげに閉じ、再びパソコンに向かう松永。

が、記事を書こうとすると手が止まってしまう。

『苛め』という文字がやたら目につく。

松永「くそ……っ！」

頭を振る松永。

と、絹子が入って来る。

絹子「雅文。奈桜から電話」

松永「悪い、忙しいんだ。後にしてくれ」

絹子「何言ってるのよ。あの子、通夜のこと聞きたいのよ。ほら国際電話だから……」

松永「うるさい！後にしてくれよ！」

怒鳴る松永に、驚く絹子。

と、奈桜の声が受話器から漏れてくる。

奈桜の声「お母さん、いいよ！兄貴に頼んだあたしがバカだったんだから」

ブツッ！松永にわざと聞こえるように

言い放ち、電話を切る奈桜。

気まずさそうに部屋から出て行く絹子。

と、携帯が鳴る。見知らぬ番号。

松永「（苛立たしげに）はい」

三分一の声「うっそ！まじで、松永？」

松永「あ？」

三分一の声「さんぶんのいちだよ、さんぶんのいち」

松永「！三……！」

○居酒屋・中（夜）

わいわい騒がしい店内。

奥には、松永、三分一裕樹（35）、小沢（35）、小高（36）の四人がいる。

三分一「にしてもお前が帰省してるとはなく。何年ぶりの再会だ？」

松永「ほぼ二十年ぶり」

小沢「どうりで皆、おっさんになったわけだ」
ドツと盛り上がる四人。

と、小高の携帯が鳴る。

小高「鬼嫁から。（わざと揶揄し）悪い帰るわ。

まだ下が小さいんだ」

三分一「じゃあ、あの話宜しくな」

松永「あの話？」

と、三分一、松永の左手をいきなり掴み、三分一「指輪なしってことは、お前もまだ独身か」

松永「もってことはお前もか」

小沢「（ひよいと顔を出し）俺もだ」

三分一「いいから早く小便に行けよ」

小沢の尻を叩き、苦笑する三分一。

三分一「悪かったな。突然、誘ったりして。迷惑だったか」

松永「いや、俺もちょうど誰かと話がー…」

三分一「何だよ？」

松永「…：変わったな、お前」

意外そうに見つめる松永。

松永「昔は絶対そんなコト言わなかったよな？

他人に気を使ったりするなんてー…」

三分一「（苦笑し）何年経ったと思ってるんだよ。

二十年だぜ、二十年。そりゃ俺も唐揚げにレモンを絞る気配りくらい見せるつつうの（笑って搾る）」

松永「そっか。そうだよな…：」

驚き、だけど納得したように頷く松永。

三分一「どうした？」

松永「…：ん、いや、実はー…」

と、そこへ小沢が戻って来る。

小沢「じゃーん！」

ポケットから手紙を出す。

なんとそれはタイムカプセルの手紙で。

松永「（吹き出す）ブツ」

三分一「実は俺も……(と、手紙を取り出す)」

大爆笑する三人。

松永「汚ねえ字だな」

三分一「(小沢の手紙を読む) 何々？ 未来の僕へ。松永に貸した五百円を回収して下さい……
…三分に貸した男塾を回収して下さい……」

大爆笑する三人。

小沢「しようがないだろ。当時は切実だったんだから！ いいから次！ 三分一の読めよ」

松永「えー俺は将来、町会議員になることが夢……は？ つまんねえ冗談だな、これ」

が、シンとして二人。

松永「……え？」

小沢「立候補するんだって、まじで」

松永「は……？」

三分一「本気だ。今度の選挙に出馬する」

松永「！」

三分一「微力ながらこの町に恩返しをしたい。こんな俺がここまでこれたのも町の人のお陰だ。覚えやすい名前を貰ったのも、今では運命だと思ってる」

驚きの目で三分一を見つめる松永。

が、次第にその顔が嬉しそうに崩れ……、
松永「ま……まじかよ、おい！ 凄えなお前、自分の夢に向かって。応援する、応援するわ！」
三分一「(嬉しそうに) 松永！」

嬉しそうに三分一の肩を叩く松永。

松永「そうか。お前、やっぱ変わったわ。二十年だもんな、二十年。そうか……人は前に進んでるんだな、だよな、歩き出さなきゃな」

まるで自分に言い聞かせるような松永。

三分一「どうしたんだよ？ お前、さっきから」
松永「何でもねえよ。まあ飲めって」

嬉しそうになみなみと酒をつぐ松永。

三分一「やっぱ俺ら、友達だな。何十年会わなかつたって一瞬で昔に戻れる。俺もお前の活躍を誇りに思ってるよ」

松永「俺こそ、勇気をもらったよ」

三分一「何だよそれ？」

松永「いや、いいんだ。過去に囚われる方が間

違ってたんだ。俺たちは不器用ながらも二十年歩いてきた……歩いてきたんだ」
しみじみと呟く松永。

○仙台地方検察庁・中

検事から事件進展の説明を受けている松永ら記者。

検事「えーその後、新しい動きはありません。質問がある方は挙手をどうぞ」

記者1「(挙手) はい。動機はやはり中学時代の苛めが原因ということですか？」

検事「ええ。容疑者の部屋の畳には、被害者の家を長年見続けていた証拠の足跡がありました。周辺の聞き込みからも容疑者は大人しい性格であり、この苛めをきっかけにさらに他人との距離がうまく取れなくなったこと、しかし被害者とは親戚ということもあり、数年に一回は法事などで嫌でも顔を合わせなければいけなかったこと、それらのストレスが重なり、今回の犯行に至ったーそれでほぼ間違いないでしょう」

納得したように席を立つ記者ら。
と、一人だけ残る松永。

その顔はやる気に満ちていて。

松永「ー女は絡んでませんか？」

検事「(手を止める) は？」

松永「三角関係や痴情のもつれ。はたまた検事殿が見逃してることは？」

検事「……記者と名乗らず被疑者に面会した覚えは？」

負けじとけん制する検事。

睨みあう松永と検事。

検事「いいんですよ？警察だけでなく、ここも出禁にしても」

舌打ちし、部屋を出て行く松永。

携帯を取り出し『阿部』の番号を押そうとするが、それを止める。

○大垣写真店・外

シャッターが締まった店。

『KEEP OUT』と書かれたテープ。

○同・居間

一人、侵入する松永。

思わず鼻を押さえる。まだ漂う血の匂い。カーテンの隙間から外を伺う松永。

松永「誰もいないことにホッとし」……」

薄暗い部屋。変色した床。

壁に飾られた写真には、おびたたいしい程の血しぶき。

それを一枚一枚見ている松永。

草原や海、空など自然の写真が、天井近くの壁にまでたくさん貼ってある。

松永「まるでサバンナだな、ここは……」

と、足を止める松永。

あの女性の写真がここにも飾ってある。

松永「！……」

その時、外に一台の車が停まる。

カーテンの隙間から覗くとパトカー。

見知らぬ警官が降りてくる。

冷や汗のでる松永。

隠れようとすると、

阿部「（後ろから表れる）先輩」

松永「！何だよ、お前か」

焦ったように外を見ると、先程の警官は、運転席で待機している。

阿部「さすがにこれは犯罪ですよ。見逃すわけにはいきません（怒ったように）」

松永「お前、幾つだ」

阿部「？三三ですが」

松永「俺はもう三五だ。ただの記者で終わるかデスクになれるかの分かれ道に立ってる」

阿部「……」

松永「いいか？邪魔をしたら佐藤商店だけじゃなくもつと別の件を探しだす。ただの後輩で終わるか、犯罪者になるか、お前にとつても今が分かれ道だ。よく考えろ」

肩で息をつく阿部。

阿部「瀬戸が拘置支所に移送されました」

松永「！思ったより早かったな」

阿部「裏付捜査も本人の供述とほぼ一致しましたし、もうこれ以上取り調べも必要ないと」
松永「1拘留か。異例だな。普通の殺人事件じやありえない」

阿部「例え過去に苛めがあつたとしても、世間の同情は被害者の大垣寄りです」

松永「俺はそれを覆す」

眼光を鋭く光らせる松永。

阿部「……会うそうですよ、先輩に」

松永「あ？」

阿部「拘置支所で待ってるからと。記者ではなく、“先輩”に話があると。瀬戸からの伝言です」

松永「……！」

○走る車(夕)

田園風景の中を運転する阿部。

助手席でパソコンを打っている松永。

車がガタガタ揺れ、打ちにくそう。

阿部「でも不思議ですよ。何で先輩なんですかね？」

窓からは、選挙のポスターが見える。

その中には、三分一の姿も。

阿部「あいつ、他の人には一切、面会しようとしなかったのに」

松永「同じだからだろ、中学が。うわっと！……お前、もつと優しく運転しろよよな。パソコンは衝撃に弱いんだから」

阿部「俺だったらら中学の奴は絶対ご免だな」

松永「他に面会者は？」

阿部「身内が数人とそれから……あ」

松永「え？」

阿部「……ああっ！」

松永「だから何だよ！」

急ブレーキを踏む阿部。

パソコンを慌てて拾う松永。

携帯を取り出す阿部。

その画面には、以前、松永が撮った大垣写真店の窓ガラスに飾られた若い女性の画像が映っている。

松永「(胸倉を掴み)め、面会に来たのか!？」
阿部「で、でも、身内じゃなかったので追いつ
し……」

松永「(パソコンで阿部の頭を殴り)何やって
んだよ!警察は!」

○ 柵辺拘置支所

座っている松永。

目の前には瀬戸。

この間より、顔色が落ち着いている。

松永「飯、食べてんのか?」

瀬戸「はい。逮捕された翌日から」

松永「凄え神経だな」

瀬戸「自分で決めたことですから」

自嘲気味に少し笑う瀬戸。

松永「日記も手紙もパソコンの履歴も全部、消
してたそうだな……意図的か?」

瀬戸「……」

身を乗り出す松永。声を潜め、

松永「俺はお前の味方だ。世の中の見方を覆す。

だから安心して話せ。女のことでも、思い出

したくない過去のこと……」

瀬戸「一番幸せな時を狙いました」

松永「……?」

瀬戸「来年挙式予定だったんです、あいつは」

松永「……!」

突然の瀬戸の告白に、動揺する松永。

少しだけ哀しげな目をしながら落ち着

いた様子で喋り始める瀬戸。

× × ×

○ (瀬戸の回想) 東京の工場・中

十四年前――

工場で働く瀬戸(20)。

他の白服の工員と違って、緑色の作業服。

しかし、手際が悪くラインが止まる。

工員1「ちよつと」

工員2「マネージャー。いい加減にして下さい

よ」

中年の女工員らが冷笑する。

瀬戸「す、すみません」

すぐさまミスを取り戻そうとするが、笑い声が気になって集中できない瀬戸。

○同・事務室・中（夕）

工場長に呼び出される瀬戸。

工場長「ライン止め3、管理ミス2」

瀬戸「すみません……」

工場長「責めてるわけじゃない。君がマネージャーになってから工場全体のミスが減ってるんだ」

瀬戸「！」

工場長「（笑顔）この調子で頼むよ」

瀬戸「（戸惑い）あ……でも……」

工場長「失敗は誰にでもある。気にするな」

瀬戸「（嬉しい）——！！」

○同・中（日替わり）

黙々と集中して仕事をしている瀬戸。

と、新人の女工員がミスしてしまう。

工員1「ちよつと〜」

新人「す、すみません」

瀬戸「だ……大丈夫だから。ミスは誰にでもあ
るから」

と、工員1がムツとしたように、

工員1「マネージャー。それセクハラですよ」

瀬戸「は……？」

工員1「若い子にばっか優しくしちゃって」

工員2「違うわよ。パワハラっていうのよ」

瀬戸「ぼ、僕はそんなつもりじゃ……」

× × ×

終了時間。

帰ろうとする工員1を待ち伏せしている

瀬戸。

瀬戸「……あ、あの……」

工員1「（苛々）何よ？早くしないとスーパー
が閉まつ……」

行こうとする工員1の腕を、突如掴む瀬戸。

工員1「!？」

瀬戸「あの……もう少し、新人には暖かな目で

その……」

工員1「……マネージャー」

瀬戸「は、はい」

工員1「五分オーバーです。残業つけといて下さいね」

瀬戸「……！」

○同・中（翌日）

新人に教えている瀬戸。

しかし工員1のことが気になって集中出来ない。

工員1「（ジェスチャーで）こうよ、こう」

工員2「うっそー」

工員1「あたしだってまさかと思ったわよ」

工員2「勘違いなんじゃないの？」

工員1「（ムッ）ほ……ほんとよ！こうやって手を掴まれて離してくれないんだから」

カーッと顔が赤くなる瀬戸。

工員1「（小声）ほら見なさいよ。顔赤くして」

工員1のところに行く瀬戸。

工員1「（ビクッ）な……何よ？」

瀬戸「ね……根も葉もない噂を流すのは……」

工員1「噂じゃないでしょ。こうやってあたしの手を掴んで連れ込もうとしたでしょ。いやらしい！」

瀬戸「……！」

瞬間、その言葉にカッとして工員1を突き飛ばしてしまう瀬戸。

き飛ばしてしまおう瀬戸。

瀬戸「あ……謝れ」

工員1「……え？」

瀬戸「謝れ、謝れ、謝れー……！」

大声で叫び、ブルブルと震えが止まらない瀬戸。

それを見て、不気味がる工員らの目――

× × ×

× × ×

× × ×

瀬戸「……」

工場長「……全治2週間だ。戸田さんも行き過ぎた部分がある。だから警察沙汰にはしない」

瀬戸「(顔を上げる)……………」
工場長「(だけど残念だが、もうここでは……………」
瀬戸「(愕然)……………」

○瀬戸のアパート・中(夕)

ひきこもっている無精髭の瀬戸(25)。
外からはクリスマスソングが聴こえてくる。

そんな中、虚ろな目でパソコンを見ている瀬戸。

画面には、出会い系の掲示板のサイトが。『じゃあIT系ってほんと?』『じゃなきゃこうやって一日中パソコンに向き合えない』『かっこいいね』『君の方がかっこいいよ、税理士だっけ?』『でもモチないのが悩み。合コンに行ってもスッチーに持っていかれるの』『アハハ』『ね、会おっか』『……………いや、いいよ。この方が楽しいし』『渋谷ハチ公前に七時。目印は赤いバラ。来るまで待ってる』

瀬戸「……………」

○渋谷ハチ公前(夜)

ざわつく人ごみ。

人にぶつかりながらやって来る瀬戸。

瀬戸「(周囲を怯えるように見つめ)……………」

と、赤いバラを持った未来(25)の姿。

未来「(気付き)……………もしかしてケンさん?」

瀬戸「(頷く)……………本名はタケシだけど」

未来「良かった!本当に来てくれたんだ」

瀬戸「あ、あの……………(紙袋からマフラーを渡す)」

未来「え?あの……………」

瀬戸「さ……………寒いと思って」

未来「……………」

瀬戸「そ……………それから全部嘘だから。掲示板に書いたこと……………」

一礼し、逃げるように踵を返す瀬戸。と、

未来「(叫ぶ)あたしも!」

瀬戸「(振り向く)!?」

未来「あたしも嘘。無職」

瀬戸「……………」

○未来のアパート・中（夕）

パソコンを修理している瀬戸。

テレビの脇には、仲良く二人で撮ったブリクラのシールが貼ってある。

未来「やっぱ無理そう？電気屋さんに頼んだら買い換えたほうがいいだろうって」

瀬戸「ど、どうかな」

と、パソコンの画面が急にパッと明るくなる。

未来「！すごい！（拍手）」

瀬戸「た、ただ、部品をこつちで用意したから、今後、店には持っていない方がいいかもしれない……」

未来「何で？別にいいじゃん。健がいるから」

瀬戸「！」

未来「壊れたらすぐ連絡するね」

未来の笑顔に、ドキッとする瀬戸。

瀬戸「ぼ、僕なんか無理だよ……」

未来「また言った！はい、百円（と、掌を出す）」

怒った未来に、千円札を渡す瀬戸。

未来「え？」

瀬戸「き、きつとこれからも“無理”って言うてしまうと思うから……先に払っとく……」

未来「……………」

瀬戸「ご、ごめん！ダメだね、こんな情け……」

と、思いきや抱き締める未来。

未来「……………いいよ、何回言っても」

瀬戸の頭を愛しそうに撫でる未来。

見つめあう二人。

自然と唇が重なる。

未来「……………健」

瀬戸「ん……………」

未来「目、つぶって……………」

言われた通り、素直につぶる瀬戸。

と、あるコトを始める未来。

瀬戸「……………!？」

未来「じつとして……………」

躊躇するが、ギュッと目を瞑る瀬戸――。

と、昔のことを思い出しー…、

× × ×

中学校の帰り道ー。

広がる田園風景。

海に沈む夕日。

背丈を隠すほどのすすきの群れ。

裕也の声「……は……くっ……」

周囲を伺う見張り役の梅宮（14）。

その脇を同級生らが林の中で何が起きて
いるかも知らずに笑いながら帰って
行く。

林の中を見る梅宮。その目には嫌悪感。

前後に動く頭。揺れる名札は『瀬戸健』。

裕也の声「待てよ、もう少し楽しませ……うっ」

と、バシッ。瀬戸を殴る音。

裕也の声「何、勝手に終わらせてんだよっ！も

う一回。くわえろや」

瀬戸「……」

起き上がる瀬戸。

屈辱に耐えながら、再び頭を動かし始
めるー……。

× × ×

ズボンをおろし、必死に舌を使う未来。

瀬戸「や……やめ……」

未来「ダメ……無理なんて言わせない……」

瀬戸「やめろっつってんだろっ！」

頭を鷲掴みにし、床に叩きつける瀬戸。

ツー……と鼻血が出る未来。

瀬戸「（ハッとし）！……ごめ……！」

未来「（脅え）いつ、いやあっ！」

瀬戸「……！」

怯える未来の目に、ショックな瀬戸ー。

○瀬戸家・外観

『瀬戸亜季・健』の表札。

カーテンの締め切った二階の部屋。

シンシンと降る雪。

○同・瀬戸の部屋・中

荒れた部屋。

空のカップラーメンが至るところに転がっている。

パソコンに向かっていている瀬戸（30）。髭が伸びたり、目は虚ろで、別人のよう。サバイバルナイフやライフル銃などのホームページを見ている。

瀬戸「（無表情）……………」

『購入』ボタンにマウスを合わせると、ノック音。

瀬戸「（舌打ち）」

息を潜める瀬戸。

気遣うように立ち去っていく足音。

しばらくして車のエンジン音―。

カーテンの隙間から外を覗くと、疲れた顔をした作業着姿の瀬戸亜季（50）が、車に乗り仕事に出掛けて行く。

見届けて、再度購入ボタンを押そうとする瀬戸。

が、その手が震えだす。

瀬戸「違う……………違うだろ……………」

再びカーテンの前に立ち、隙間から外を憎々しげに見据える瀬戸。

向こうに見えるのは、『大垣写真店』の看板。

瀬戸「謝れ……………」

ポツリと呟く瀬戸。

瀬戸「謝れ……………謝れ……………謝れよおお……………！」

○大垣写真店・外

春子の声「ありがとうございますー！また来年も宜しくお願いしますねー」

明るい春子の声を通りまで漏れてくる。軒先に身を潜め、じっと中の様子を伺っている瀬戸。

瀬戸「……………」

× × ×

瀬戸の部屋。

カーテンの隙間から、『大垣写真店』の二階を見つめる瀬戸。

× × ×

大垣写真店。

通りに面した窓ガラスには『ゴールデン
ウィークの営業日』の案内が。

軒先に身を潜め、様子を伺う瀬戸。

× × ×

瀬戸の部屋。

カーテンの隙間から、『大垣写真店』の
二階を見据える瀬戸。

手には双眼鏡。

× × ×

大垣写真店。

うるさいほどの蝉の鳴き声。

額から汗を流しながらも、軒先に身を潜
め様子を伺う瀬戸。

× × ×

瀬戸の部屋。

カーテンの隙間から、『大垣写真店』の
二階をじっと見据える瀬戸。

少し変色し始めた畳。それは瀬戸が長い
間、そこに立ち続けた『足跡』で。

○大垣写真店・外（夜）

春子の声「ありがとうございますー！」

笑顔で出て行く客。

通りに面した窓ガラスには『写真年賀状
承ります』の貼り紙。

軒先に身を潜め、かじかむ手を合わせも
せずにじっと佇む瀬戸（34）。

瀬戸「……」

と、男の声。

男の声「母ちゃん。これ九十枚、刷っというて」
春子の声「おーお。マネージャーともなると違

うもんだねえ」

瀬戸「！」

慌ててカーテンの隙間から中を覗く瀬戸。
そこには春子に年賀状を手渡す裕也（34）
の姿が。

瀬戸「……！」

長雄「大したもんだ。その若さでマネージャー
に昇進するとは」

裕也「んな大袈裟なもんじゃねえよ」
長雄「課長とやり合ったのも無駄じゃなかったな」

裕也「（苦笑し）同僚には止められたけどな」
長雄「いや。父さんはそれでいいと思う。最近の子は感情を表に出さない分、何を考えているかよくわからん。その点、お前は昔からストリートだ。たまには人を傷つけることもあるだろうがいいだろ。失敗の一つや二つ」

瀬戸「なーっ！」

裕也「なあ。今度の連休、店って休めるの」

長雄・春子「（顔を見合わせ）？」

裕也「父ちゃんと母ちゃんに会わせたい人がいるんだ」

春子「裕也……！」

裕也「ただ、まだ誰にも言わないでくれ。ふ……振られるかもしれないだろ？」

恥ずかしそうな裕也に、爆笑する二人。

裕也「な、何だよ！」

長雄「ーお前、いい人に出会ったな」

裕也「え？」

長雄「自分より彼女のことを優先している。父親の俺から見ても、目が優しくなった」

しみじみ呟く長雄と春子。

一人、暗闇の中で愕然とする瀬戸ー。

○瀬戸家・瀬戸の部屋・中（夕）

西日が差し込む室内。

パソコンに向かっていている瀬戸。

瀬戸「なんで……なんであいつが……なんで……！」

画面には、ナイフや銃のホームページが。

瀬戸「性能Rー10……180MM……」

じっと虚ろな目で銃を見る瀬戸。

その目は虚ろで虚無感に満ちー……。

○大垣写真店・外（夜）

数週間後。

灯りの消えた店内。

裏には、停まっている裕也の車。

そんな中、二階を見上げる瀬戸。

瀬戸「……」

部屋が暗いことを確認すると、玄関の戸に手を掛ける。鍵が掛かっている。

瀬戸「(舌打ち) 何で今日に限って……」

○同・居間(夜)

裏口から侵入する瀬戸。

計画が狂い、少し焦った様子。

窓から差し込む月明かりに室内の写真が青白く浮かび上がる。

草原や海、空、など自然の写真に取り囲まれる。

まるで大自然の中にいるような感覚に陥る瀬戸。

一瞬、息を止め、魅入ってしまう。

瀬戸「(息をのみ)……」

と、足元に何かぶつかる。

それは空の一升瓶。
見ると、宴会でもあったのかテーブルにはグラスやつまみが散乱している。

その隣りには、数枚の家族写真。

瀬尾「(舌打ち) チッ……」

と、足音。

長雄の声「裕也か？何だ、眠れないのか？」

パジャマ姿の長雄が顔を出す。

が、誰もいない。

長雄「気のせいか……」

家族写真が伏せられていることに気付く長雄。

それを元に戻し満足そうに微笑む長尾。

と、その瞬間――、

長雄「ぐえっ」

奇妙な声を上げ、床に崩れ落ちる長雄。

後ろには、鉈を持ち無機質な目の裕也が反動で廊下をゴロゴロと転がる一升瓶。

と、ギシギシ……と誰かが階段を下りる音。

廊下に転がっていた一升瓶を手に持ち、

おそるおそる顔を覗かせたのは裕也。

横たわっている長雄を見て、

裕也「(ホッ) 何だよ、親父か。おいおい。こんなところで寝たら風邪ひー！」

と、固まる裕也。

目の前に男が佇んでいる。

裕也「!?…」

と、裕也の足首を誰かが掴む。

見ると、長雄が額から血を流している。

助けを求め必死にしがみついている。

裕也「か…母ちゃん! 母…」

声に鳴らない声を発する裕也。

瞬間、月明かりが男の横顔を照らす。

裕也の脅えた目に映ったのは――、

裕也「はあ?」

瀬戸「!」

裕也「何でてめえがいんだよ?」

瞬間、瀬戸にがんとつける裕也。

逆に躊躇する瀬戸。

裕也「何、人の家に勝手に上がってんだよ! ク

ソが」

瀬戸「ク…クソ?」

裕也「クソだろ、お前みたいな無職は」

瀬戸「!」

瞬間、鉦を振り下ろす瀬戸。

飛び散る血しぶき。

抵抗するが鉦を振り下ろす瀬戸。

瀬戸「ク…クソじゃない俺は!…! 俺は…!」

と、ピクリとも動かない裕也。

ハッとすする瀬戸。

瀬戸「な…何だよ…こ…これくらいで…」

裕也「…」

瀬戸「あ…謝れ、謝れ、謝れえええ!」

もう一度、鉦を振りおろそうとして、視線を感じバツと振り向く瀬戸。

と、そこにはあの女性の写真が。それは、

裕也の婚約者で…。

が、月明かりに照らされたその女性は、

慈愛に満ち、まるで女神のように微笑ん

で見え…、

瀬戸「…」

次第に落ち着きを取り戻していく瀬戸。

幻想的な空間。
青白い光。
大自然。
動物たち。

瀬戸「……ここはサバンナ。弱肉強食の世界……」

最後の力を振り絞り、瀬戸の足を掴む裕也。

だが今度は、落ち着いたように冷静に的確に、裕也に向かって鉈を振り下ろす瀬戸。

大量の血しぶきが、壁に高く飾られた女性の写真にまで飛び散る――。

× × ×

○（回想終わり） 棚辺拘置支所・面会室（夕）

息をのむ松永。

目の前には俯いた瀬戸。

瀬戸「似てるんですよ」

松永「……え？」

瀬戸「あいつとあなた」

松永「！」

動揺するかのように頬を汗が伝う松永。

松永「似てる……とは……？」

瀬戸「二十年前と何も変わってないその目が」

松永「！」

瀬戸「やり直そうとした……何度も何度も。だけれどどうしてもあの時のことが蘇って……」

今もあの時に生きざるをえない……」

松永「！」

瀬戸「過去になんかできない……！」

松永「……！！！」

ギュッと拳を握る瀬戸――。

松永の額を冷や汗が流れる。

瀬戸「どうして苛めた奴が幸せになって、犠牲になった人間がいつまでも苦しまなければいけないのか……だから……」

顔を上げる瀬戸。

瀬戸「だから殺したんです。誰も助けてくれな
いなら自分がやるしかない……その代わり
一生あのごは胸に秘めておこうと……！」

松永「……」

瀬戸「巡礼って知ってますか？」

松永「……ああ」

低く答える松永。

瀬戸「八十八箇所神社や寺院を巡るんです。いろんな人がいる。子供を亡くした人、配偶者に先立たれた人、自分を見つめ直したい人……」

松永「参加したのか？」

瀬戸「……その中に吉田宏美さんがいました」

松永「（驚く）！」

じつと見つめる瀬戸。

瀬戸「夜になると宿舎に集まって、皆で話をするんです。話したくない人は話さなくていいんだけど、宏美さんはペラペラと喋っていました。僕は中学のことなど話したくもなかったし、聞きたくなかった。なのに宏美さんは、皆がずつと聞いてくれるから自分でも興奮を止められないよう喋り続けていました」

松永「（動揺）……」

瀬戸「（苦笑し）大丈夫ですよ。松永さんの名前は出ませんでしたから」

松永「（カツ）！そうじゃなくて……！！」

瀬戸「何で宏美さんだったんですか？」

松永「！」

瀬戸「驚きました。小学校では明るかった宏美さんが、中学であんな風になってるなんて。でもまさか自分もすぐそうなるとは思ってなかったけど……」

松永「……」

瀬戸「何で僕だったんですかね……」

松永「ー！」

自嘲気味に笑う瀬戸。

瀬戸「……面会申請書を見た時、不思議でした。何でこの人が僕に会いに来るんだろう？もしかしてもう少し待てば誰かが違った景色に連れてってくれたんじゃないか？いろんな考えが頭を廻りました」

松永「……」

瀬戸「そんな時、宏美さんを思い出したんです。

あの人はまだ自分の人生を受け入れてない。だから巡礼や宗教にはまる、何かにすがろうとする。だけど僕は受け入れた。受け入れたから殺した。だったら会ってもいい。興味本位だろうが罵りだろうが、もう僕には誰の言葉も何の影響もないのだから」

松永「―：：」

瀬戸「おかしかったですよ。僕を動揺させようと槌田の話をしたり、ギャグを交えて話す松永さんの姿を見てると」

松永「（震える拳をギュッと抑え）…：：！」

瀬戸「ああ、この人は二十年前と何も変わってない。自分の目でしか物事を見ようとしらない。僕が苦しんだ二十年前に、なんにも変わってないんだって。思わず眼鏡をプレゼントしようと思っただけですよ」

松永「（怒りで顔がみるみる赤くなり）…：：」

時計を見る記録係。

それを、目の端に捉える瀬戸。

瀬戸「あなたがこの話をどう捉えようと勝手に。ムカつくと捉えるのも結構、哀れだと捉えるのも結構」

松永「…：：」

瀬戸「ただ過去に生きざるをえない人がいることを知ってほしかった」

松永「（顔を上げる）！」

瀬戸「消せないんです、過去は。消せないんです、あなたたちが謝ってくれないと」

松永「―：：！！」

○棚辺拘置支所・外

拘置支所から出てくる松永。

ふらつく松永、足がもつれて転ぶ。

松永「…：：っ」

通行人「（怪訝そう）大丈夫ですか？」

松永「ええ、大丈夫で…：：」

が、その肩は震え…：：。

○松永家・松永の部屋・中（夜）

二十年前の手紙を見ている松永。

『僕は二十年後もまだジャンプを読んでいますか？くせ毛は治ってますか？野村君に借りたノートは……』
ふざけた手紙を放り投げ、額前で手を組む松永。

と、携帯が鳴る。

ユリ「雅文？」

松永「……ユリ」

(以下、ユリの部屋とのカットバックで)

ユリ「ずっと連絡がないから、浮気でもしてるのかなーってちょっと心配になって」

松永「……ユリ」

ユリ「ん？」

言葉に詰まる松永。

松永「……ユリは」

ユリ「ん？」

松永「何で俺と付き合った？」

ユリ「(苦笑し) 気が合うから」

松永「……え」

ユリ「知ってるよ。雅文がそんなにいい人間じゃないこと。あたしもそうだし」

松永「……もし……もし、自分が取り返しの……つかないことをしたら……」

が、言葉にならずそれ以上黙り込む松永。

ユリ「……生きる」

松永「！」

ユリ「とにかくずーっと生きる。何年、何十年と時間が経って見えるものがあるから。時間が答えを連れてきてくれるから」

松永「見つからない場合は……？」

アルバムに映る宏美や、新聞に乗った瀬戸が目に映る松永。

ユリ「……見つけるまで生きる。それって結局自分との戦いだと思うから。自分との戦いだからしんどければ降りてもいいと思うし」

松永「……降りる……」

ユリ「でも雅文が降ろさせないでしょう？」

松永「！」

ユリ「降りそうになったら、雅文はあたしを助けるよね？」

松永「……!!」

ユリ「人間には窓があるのよ」

松永「窓？」

ユリ「小さな窓。雅文と手を繋いで歩いていると、その窓がどんどん広がるの。そこからは広くて綺麗な青空が見える。他の人とは見えなかった景色が見える。だから」

松永「だから……」

ユリ「……皆、そうやって少しずつ優しくなっていくんだと思う。最初から優しい人間なんていない。皆、少しずつ優しさを学んでいくのよ」

松永「……」

ユリ「最初から手を取り合える関係で生まれてくればいいのにね」

松永「え？」

ユリ「その前にやるべきことがあるなんて残酷だよ。それじゃ弱肉強食―まるでサバンナじゃない……」

松永「――!!」

電話を切り、横になる松永。

天井近くの窓からは月明かりがさしこんでいる。

その光りの先には、放り投げた手紙が。もう一度、手に取る雅文。

と、あることに気付く。

松永「ぼ……く……の……しよ……?」

上の文字を右から読むと、とあるひとつの文章になっている。

松永「う、嘘だろ……?」

もう一度、手紙を見つめる松永。

くだらない文章。

汚い字。

だけどそこに秘められた想い。

ユリの声「雅文と手を繋いで歩いていると他の人とは見えなかった景色が見える。だから」

松永「……!!」

ギュッと手紙を抱き締める松永。

愛しそうに、大事そうに。

そこには、『ぼくのしょうらいのゆめは

きしゃになること』と書いてある。
そんな松永を静かに照らす月。

○居酒屋・中（夜）

三分一と対面している松永。

松永「謝ろうと思うんだ」

三分一「は？」

メニューから顔を上げる三分一。
と、そこへ店員がやって来る。

店員「お決まりでしょうか？」

三分一「ああ。焼き鳥の盛り合わせと唐揚げと、

それからー：松永はどうする？」

松永「ー謝るよ、吉田宏美に」

三分一「！」

動きが止まる三分一。

店員「あの……？」

三分一「(ハッ)あ、じゃあとりあえずそれで」

店員「かしこまりました」

店員が席を外すと、三分一、松永に慌て

て目を戻し、

三分一「吉田って誰だよ？」

松永「だから吉田宏美」

三分一「は？何で？何かしたのかよ、お前」

松永「しただろ。俺もお前もさんざん苛めた」

と、プハッと笑い出す三分一。

三分一「そんなの中学時代の話だろ？時効時効

つかお前も、今更何言ってるんだよ？本人も

忘れてるつつうの。あ、チヂミも頼むか」

松永「忘れてねえよ」

三分一「なあ、どうせならチヂミ二皿ー……」

松永「ー自殺したんだ」

三分一「！」

店員「唐揚げ、お持ちしましたー」

メニューを持ったまま固まる三分一。

松永「いいのか？チヂミ」

三分一「(ハッとして)……あ、ああ。後で。

……自殺ってあいつが？」

松永「いや、その弟」

三分一「なんだ。じゃあ関係ないだろ」

急にホッとしたように、から揚げにレモ

ンを搾り始める三分一。

松永「吉田は中学の時の苛めが原因で宗教には
まり、弟はそれが原因で自殺した」

三分一「だから考えすぎだって。何で今更二十
年前のことで弟が自殺すんだよ」

松永「二十年前じゃない。あいつらにとつては
“今”なんだ」

三分一「何か他にいろいろ事情があったんだろ。
二十年って言やあ赤ん坊が成人する年だ
ぜ？な、チヂミも頼もうぜ」

松永「……俺は本気だ」

ボソリと呟く松永。

三分一「お前、疲れてんだよ。最初会った時も
俺そう言ったろ。痛っ！レモンの汁が目によ
……」

松永「―でないと一文字も書けない」

三分一「おい、松永。悪いがおしぼり……」

松永「俺は本気だ！」

三分一の胸倉を掴む松永。

三分一「―」

真っ直ぐに三分一を見据える松永。

三分一「……松永」

松永「ああ」

三分一「離せ」

松永「え？」

三分一「離せよ、手」

松永「！」

一瞬、鋭く睨む三分一。

思わず怯み、手を離してしまふ松永。

三分一、ネクタイを手で締め直し、おし
ぼりで顔を拭きながら、

三分一「(笑顔で) ハハ、親父だなあ、俺も」

松永「……」

三分一「なあ、松永」

顔を拭きながら、話をする三分一。

三分一「俺は会社を辞めたんだ。選挙に立候補
するために」

松永「……」

三分一「もし落ちたら次に挑戦するのは四年後。
その頃には仕事を探すのも難しいだろう。い

や、今だって難しい。三十五だぜ？俺ら」

松永「……」

三分一「わかっているとと思うが、大事な時期なんだ。下手なトラブルは起こしたくない」

松永「わかっている。だから俺一人で謝りに行く」

三分一「松永！」

松永「お前の名前は出さない。安心しろ」

三分一「何、勝手なこと言ってるんだよ!!」

松永「俺は吉田を苛めた。そして吉田は今も苦しんでいる。だから謝りに行く」

三分一「だ……だから！もしあの女がいい気になつて、俺に不利な噂を流したらどうする

!?選挙まで一週間もないんだぜ!」

松永「何慌ててんだよ。もし仮に流したとしても誰が信じる？宗教にはまった女と、選挙に立候補するお前、どっちを信じる？」

じつと三分一の目を見据える松永。

三分一「だ……だとしても辞めろ、いいから辞めろ！面倒なことになったらやっかいだ」

松永「三分一！」

と、そこへ客が一人、入って来る。

奈桜の声「いつもの。それと灰皿」

見ると、それはバックパックを背負った

汚い格好の松永奈桜（32）である。

松永「奈桜」

奈桜「（驚き）……兄貴」

と、三分一話題が変わることにホツとしたかのように、

三分一「（愛想良く）久しぶり。奈桜ちゃん。どっか出掛けてたの？」

奈桜「（不機嫌そうに三分一を一瞥し）……」

松永「奈桜。同級生の三分一裕樹だ。覚えてないか？今度、町の選挙に立候補する。お前も良かったら一票頼むよ」

が、煙草の煙をわざと吹きかける奈桜。奈桜「入れないよ。あんたなんか絶対」

三分一「……!!」

ビールを一气飲みする奈桜。

松永「わ、悪い。こいつ、昔から変な奴で愛想がなくて……」

と、ハツとする松永。

松永「線香の匂い……？奈桜、お前、もしかして……！」

と、奈桜が、いきなり可笑しそうに笑い出し、ポケットから何かを取り出す。

それはタイムカプセルの手紙。

奈桜「これ、役場前の掲示板上に、公表されるって知ってる？」

松永・三分一「え」

奈桜「(嬉しそうに)知らないんだ？」

三分一「(満更でもなさそう)おいおい、やめてくれよ！選挙に出たいなんて書きちゃったぞ、俺」

松永「(苦笑)」

意味深に笑う奈桜。

奈桜「なんも書かれてないといいね」

三分一「……え？」

奈桜「何かまずいこと、誰かに書かれてないといいね」

三分一「……！」

○松永家・松永の部屋・中(夜)

原稿を書いている松永。ふと顔を上げる。

松永「そーいや、あのタイムカプセルの手紙……：瀬戸はどうしたんだろう……？」

携帯を取り出すが十二時を過ぎている。

松永「もう十二時か……！」

原稿は完成間近。

見出しも、『本当の被害者とは？』に変えられている。

松永「……送るのは、吉田に連絡してからだ」

そう呟くと、携帯をもう一度取り出し、どこかに掛け始める松永。

○週刊次代編集部・中(夜)

深夜にもかかわらず忙しそうな部内。

上地「だから、何度リメイクさせるんだよ！やり直し！」

編集者「デスク！3番、松永さんからです」

忙しそうに肩に受話器を挟み、原稿をチ

エックしながら電話に出る上地。

(以下、松永との部屋とカットバックで)

上地「おう。どうした」

松永「明日、送ります」

上地「送る？送るって何を」

松永「原稿です。正確には早くて明日、遅くても来週には。次号に間に合うよう早めに連絡を入れておいた方がいいと思ってます」

上地「そうか。だったら今すぐ戻って来い」

松永「ええ。原稿を書きましたらすぐにでも」

上地「違う。今すぐにだ」

松永「は？原稿がまだー：：」

上地「戸田議員がお前に会いたがってる」

松永「！」

上地「今度こそ特集でいくぞ」

松永「で、ですが、この事件はー：：!?」

上地「ー終わったんだよ」

松永「え」

上地「もう忘れられたんだ。世間から」

松永「ー：：！」

切れる電話。

しばし呆然とする松永――。

と、携帯が再び鳴る。

松永「デ、デスク!？」

三分一「ー俺だ」

松永「！三分一：：：」

○選挙事務所・中(夜)

(以下、松永の部屋とのカットバックで)

月明かりのさしこむ中、自分のポスターを見ながら、電話を掛けている三分一。

三分一「悪い。仕事申中だったか？」

松永「い：：いや、どうした？」

三分一「明日は時間が取れない。明後日なら都合がつく」

松永「都合？何のことだ」

三分一「吉田のことだよ」

松永「！」

三分一「お前のお陰で目が覚めた。俺も謝りに行く。感謝するよ」

松永「わ……わかった。明後日、三時に」

三分一「――松永」

松永「ん？」

三分一「……ありがとうな」

松永「――！！」

複雑な表情の松永――。

一方、三分一の目も鋭く光り――。

○選挙カー・中

アナウンス嬢の声「三分一、三分一裕樹をお願いします」

窓から笑顔で手を振る三分一。

誰もいなくなると、後部席に戻り、電話を掛ける。

三分一「企画課をお願いします」

(以下、役場とのカットバックで)

担当者「はい、役場企画課」

三分一「すみませんが、タイムカプセルの手紙が公表されるといふのは本当ですか？」

担当者「え？ええ。二十年前にも公表すること

を前提にお書き下さいとお伝えしてますが」

三分一「そうでしたか。何せ二十年前のことなんで忘れちゃいましたねえ」

担当者「もちろん、公表を拒否される方は、事

前に申し出て頂ければ控えますので。あと、

亡くなった方も」

三分一「(ホツとし) そうですか、亡くなった

方も……。ちなみに誰が控えるか、教えてもら

えますか？」

担当者「それはちよつと個人情報にあたりませ

ので――」

ブツツ。笑顔のまま、途中で電話を切る

三分一。スタッフにわからぬよう唇を噛

み締め――。

○農作業小屋・中

どんより曇り空。

割れた窓の隙間から覗いている三分一。

一台の軽トラックがやって来る。

三分一「(見据え)……………」

雨合羽を着た農家の人が、田んぼに積んである苗箱を数箱抱え、行ってしまふ。

三分一「……………変わってねえな」

ポツ……………と窓ガラスに雨が滴り始める。

壁のくすんだ手形の跡が目に入る。

忌々しそうに、それを見つめる三分一。

三分一「……………」

と、割れた窓ガラスに脅えた宏美が映る。

ゆっくりと振り返る三分一。

三分一「持ってきたか？」

宏美「……………」

三分一「(笑顔で)ほら、こう四角い白い封筒

に入った手紙だよ。吉田宏美様へって書いて

あっただろ？もう一通は吉田拓実様。そうだ

な、確か二週間前に送られてきた……………」

宏美「……………」

宏美、おずおずと肩に掛けたポシエツト

から封筒を取り出す。

笑顔になる三分一。

三分一「そう、それだ。悪かったな、急に電話

して。アルバムを取っておいてよかったよ」

上機嫌で受け取るが、それはガス代金と

水道代の明細書で。

三分一「！これじゃねえよ！」

宏美「(ビクッ)」

三分一「(気を取り直し)て……………手紙だよ、手

紙。タイムカプセルの。四角い……………四角って

わかるか？こういう形で……………」

宏美「(脅え)……………」

三分一「(苛つく)じゃあ役場には電話したか？

公表しないで下さいって。弟の分はいい、お

前のだけでも……………」

宏美「……………」

舌打ちをし宏美から荒々しくポシエツ

トを奪い、中身を床にぶちまける三分一。

数珠やお守りが散らばるが、手紙はない。

と、あるものが目に入る。

それは、コンドーム。

三分一「……!?!」

宏美を振り返る三分一。
背を向け、脅えながらも慣れたようにあの『壁の手形』に手をつけ、ズボンを降ろし始める宏美。

三分一「(カッ!) や……やめろ! もう俺は昔の俺じゃないんだ!」

カッとして宏美を殴る三分一。

鼻血の出る宏美。

ハッとする三分一。

慌てて手を差し伸べるが、農作業小屋から逃げ出す宏美。

舌打ちし、追い掛ける三分一。

雨の中、田んぼの泥に足を取られ、転びそうになる三分一。

農道向こうには一軒家。

それは宏美の家。

三分一「(舌打ち) ……っ」

が、ついに泥に足が取られ、転ぶ宏美。
三分一「い……言え! 手紙になんて書いた!?

俺のことを書いたのか!?!」

宏美「……な……ぶつ……み……」

三分一「あ?」

宏美「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無阿……」
三分一「(カッ) 何、念仏なんか唱えてんだよ!」

カッとし、宏美を蹴飛ばす三分一。

と、足を滑らせ、下の田んぼに落ちていく宏美。

三分一「う……嘘だろ……!?!」

ありえない方向に曲がった宏美の首。

白く細い首筋に、真っ赤な鼻血がすうつと伝う。愕然とする三分一。

が、激しい雨がその血を洗い流していく。

三分一「(ハッと) ……恵みの雨……」

天を仰ぐ三分一。

掻き消されていく三分一と宏美の争つた足跡。今起こった出来事も音も何もかも全て掻き消すように雨は降り続き――。

○松永家・リビング・中
上地の声「戸田議員がお前に会いたがってる」
松永「……」

テレビには、記者に囲まれた戸田の姿。
それを見ている松永。

と、奈桜がバックパックを背負って来る。
松永「何だよ、また旅行に行くのか？」

奈桜「（と、五千円札を付き返す）線香代。拓
実が可哀想だから返す」

松永「な……！可哀想ってどういう意味だよ」
が、無視して部屋から出て行く奈桜。

松永「だ……大体お前は昔っから俺に対して不
機嫌な態度ばっか取りやがって。一体、何な
んだよ!?何が不服なんだ!？」

奈桜「卑怯なところ」
松永「！」

奈桜「周りが迷惑なの。いい加減、大人になり
なよ」

松永「……!!」
追い掛けようとする松永。

と、家の電話が鳴る。
松永を無視し、電話に出る奈桜。

奈桜「はい、松永……お待ち下さい」
受話器を松永に渡す。

松永「？誰だよ」
奈桜「いいから」

松永「？（訝しげに出る）もしもし？」
三分一の声「松永」

松永「！三分一」
ハツとして腕時計を見る松永。

もう二時四十五分を回っている。
松永「わ、悪い。少し考え事をしていて」

三分一の声「考え事？」
松永「こっちの話だ。ところで今日なんだが」

三分一の声「死んだ」
松永「は？」

三分一の声「吉田宏美が死んだよ」
松永「（愕然）よ、吉田が……!？」

奈桜「……？」

○吉田家・通夜会場・玄関（夜）

『故・吉田宏美儀葬儀式場』の看板。

忙しそうに対応する親戚1、2。

と、玄関に目を留める。

そこには松永が。

親戚1「あら、あなたこの間の……」

親戚2「同級生よね？確か拓実君の」

松永「……いえ、宏美さんです」

親戚1・2「え？」

松永「宏美さんの中学時代の同級生です……」

親戚1・2「……」

呆然としたまま中に入っていく松永。

怪訝な顔で見る親戚1、2――。

○同・中（夜）

祭壇に飾られた宏美の写真。

それは中学時代に撮られたあの丸写真で。

松永「（唇を噛み締め）……」

三分一「この写真しかなかったらしい」

振り返ると、三分一がいる。

三分一「どうした？シヨックで声も出ないか」

松永「……あと一日早かったら……！」

三分一「俺のせいだな。すまない」

松永「……三分一」

三分一「ん？」

三分一をじっと見つめる松永。

松永「（苦しげに頭を振り）いや、何でもない」

三分一「……俺だと思ってるのか？」

松永「……！」

三分一「畑で発見された時、鞆には数珠やお守りが入っていたらしい。本当だったんだな、宗教にはまっていたというのには」

宏美の遺影を見つめる三分一。

三分一「警察は家に帰る途中、雨で足を滑らせたと事故死扱いだ……違うのにな。二十年前にきっかけを作ったのは俺だ。だから俺のせいだ」

悔やむ三分一の表情を見つめる松永。

松永「……いや、俺だ。俺が迷ったから……」

と、喪服姿の麻美が親族に支えられやっ
て来る。

疲れた表情、ぼさぼさの髪。

松永「ご愁傷さまです。私、ちゅ……中学時代
の……」

思わず言葉が震える松永。

と、隣りにいた三分一が、前に出て、
三分一「同級生の三分一と松永です。ご愁傷様
です」

堂々と深々と一札をする三分一。

麻美「わかりましたか……?」

松永「え?」

麻美「宏美の部屋は、二階の突きあたりです：

：

松永「……?」

意味がわからず困惑する松永。

が、三分一は気にもとめずに、端に座る。

松永「?どういうことだ?」

三分一「誰かと勘違いしているんだろう」

松永「勘違い……」

× × ×

いよいよ棺に蓋をし、釘が打たれ始める。

と、親族の手を払いのけ、よろよろと宏

美に近づく麻美。と、転倒する。

咄嗟に駆け寄る松永。

懐から何かを取り出す麻美。

それはタイムカプセルの手紙で。

松永「……!」

三分一「(周囲に気付かれないよう小声で)あ
んなところに……!」

開封せずに、そのまま棺に入れる麻美。

松永「(驚き)……読まないんですか?」

麻美「……いいんです。みんな一緒に燃えやし

てしまえば……」

松永「……!?!」

再開する釘打ち。

と、松永の携帯が鳴る。

親族に睨まれ、慌てて廊下へ出る松永。

松永「何だよ!」

奈桜の声「あいつなの!」

松永「は？」

奈桜の声「拓実の姉を殺したのは三分一裕樹なの！」

松永「は!?何を根拠にー…」

奈桜の声「そこにいるなら引きずりだして。あいつ、絶対、拓実ん家で何かしでかすはずだから」

松永「…：奈桜、親友が亡くなって落ち込む気持ちもわかるが、思い込みだけでー…」

奈桜の声「何で兄貴にはわかんないの!その目で一体何を見てるの!?!」

松永「ー…!!」

電話を切る松永。

戻ると、三分一が麻美の肩を支えている。どことなくホツとする松永。

釘を打つ音にまざって、親族らの嗚咽が漏れてくる。

もちろん三分一の肩も震えている。

松永「(再びホツとし) ……」

視線を反らし、集中しようとする松永。と、ふと視線を感じ、振り返る。

と、そこには拓実の遺影が。

瞬間、ほくそ笑む三分一の顔が目に入る松永。

松永「…：!?!」

その肩は嗚咽で震えているのではなく、笑いを堪えて、小刻みに震えていることに気付きー、

× × ×

麻美の声「宏美の部屋は、二階の突きあたりです…」

× × ×

奈桜の声「あいつ、絶対、拓実ん家で何かしでかすはずだから!」

× × ×

麻美「…：いいんです。みんな一緒に燃えやしてしまえば…」

× × ×

ハツとする松永。

松永「ま、待って下さいー…!!手紙をー…!!」

松永の思いがけぬ行動に、ざわつく親族。舌打ちし止めに入ろうとする三分一。

と、親族1、親族2が、それを制止する。

親族1「あ……麻美さん！こ……この人よ！きつと宏美ちゃんを中学時代、苛めてたのは……！」

親戚2「拓実の同級生だなんて嘘ついて……！何かやましいことがあったからやって来たんでしよう！」

松永「ち……違います……俺は……」

親族らに囲まれる松永。

その隙間から宏美の遺影が。

まるで松永を裁くかのようにじつと見つめる目。

松永「ち……違う、違う……俺は……俺はただ本当のことを……！」

と、急に耳をふさぐ麻美。

麻美「あ……う……うわあああああ！」

親戚1「あ……麻美さん!!」

耳をふさぎ、蹲る麻美。

松永をどかし、駆け寄る親族。

ほくそ笑む三分一。

無言の宏美――。

○松永家・リビング・中

奈桜「……そこに座ってた」

松永「え？」

テーブルの上の新聞には、『女性転落死 事故と断定』の小さな見出し。

奈桜「拓海……一度、家に連れてきてご飯を食べさせたことがあったの。雨の日だったかな。いきなり死にたいなんて言うから」

松永「……」

奈桜「鬱とかって天候に左右されるのかな……」

本当に鬱かどうかは知らないけど」

奈桜、哀しそうに笑い、

奈桜「兄貴のことも知ってた」

松永「……」

奈桜「でも何も言ってなかった。あいつ、他の奴より空気読めるから。友達も多かったし」

松永「……」

奈桜「……覚えてる？兄貴とあいつが卒業後、中学に遊びに来て、部活に顔を出した日のこと」

松永「……全国大会に出場が決まった時だ」

奈桜「そう。樋田先生のお陰なのに、さも自分たちが陸上部を強くしてみたにいきなりやっつけてきてさ。恥ずかしくなって保健室に逃げ込んだら拓実がいたの」

松永「……！」

奈桜「拓実、吐いてた。その時、初めて苛めのことを聞かされて……私、そこら辺にあるハサミを持って兄貴たちをやっつけに行こうとした。したら、ダメだよ、そんなことしたら、姉ちゃんがもっと苛められるって」

松永「……」

奈桜「……だから兄貴が自然と三分一裕樹と遊ばなくなっていたのを見てホッとした」

松永「……あいつじゃない……俺も苛めた。苛めたんだ……」

奈桜「けど兄貴は、動揺しなかったでしょう」

松永「……？」

奈桜「手紙よ。タイムカプセルの。居酒屋であたしがカマ掛けたやつ。冷静に考えればわかるじゃない？あのイベントをやったのは中学生だけだった。小学生の私たちは、役場の花壇に花を植えただけ。なのにあいつはそんなことにも気付かず動揺した。おそらく拓実や宏美さんが手紙に何か書くと思ったのよ、書かれちゃまずい何かを……！」

後悔を滲ませ、唇を噛み締める奈桜。

奈桜「ここには海も山もある、砂防林だってある。なのに何で家の近くなの？家の近くで転落死なんかするから不自然なんじゃない……！きつと怪しまれないようにあいつが用意周到に仕組んだのよ。悪いことを考える奴はいっだって自分を守るように全部を計画して……！」

ギョツと拳を握る奈桜。

松永「違う……」

奈桜「兄貴！まだあいつを庇うの!？」

松永「違う。誰が苛めていたかを決めるのはお前じゃない……吉田だ」

奈桜「!」

松永「吉田宏美だ」

奈桜「……!」

視線を落とす松永。

そこには中学のアルバムが。

松永の目に映る笑顔の自分と三分一。

笑顔のクラスメイトたち。

笑ってないのは、『宏美』ただ一人だけ。

○柵辺拘置支所・面会室・中

座っている松永。

看守に連れられやって来る瀬戸。

瀬戸「……」

落ち着いた様子の瀬戸。

だが前のように松永を見ようとし
ない。興味をなさそうで、まるで生きる気力が

ないよう。

が、それは松永も同じで。

松永「……どっちなんだろうな。本当の被害者

は……」

瀬尾「……」

松永「……一っだけ聞いていいか？」

俯いたままの瀬戸。

松永「お前、二十年前の手紙に何を書いた？苛めてた奴の名前を書いたか？それとも何か

他の……」

と、瀬戸が微かに顔を上げる。

瀬戸「……何ですか？」

松永「え？」

瀬戸「その二十年前の手紙って……」

松永「……!」

○××マート・中

働く瀬戸亜希(55)。

子供が店内を駆け回り、お菓子の箱にぶつかり、床にぶちまけてしまう。

苦笑しながら、それを拾う亜希。
と、すつと菓子を拾う手。

亜希「(丁寧)に頭を下げ) すみません」

松永「二十年前の手紙をどうされましたか？」

亜希「！」

名刺を差し出す松永。

松永「……取材じゃありません。ただ聞きたくて……」

亜希「……」

エプロンのポケットから白い封筒を取り出す亜希。

松永「(受け取り) ……」

松永に渡し、再び菓子を箱に積み始める亜希。

その隣りで手紙を開ける松永。
と、そこには、『二十年后なんて想像がつかない。果たして僕は生きてるのだろうか？』の文字。

松永「(胸が痛く) ……」

『でも、明るく生きていたい。僕と母さん二人、何の悩みもなく笑顔で。だから僕は自分を信じる。そのために強くなる。未来の僕を決めるのは今の僕だから。これからの僕だから』

松永「……！」

亜希「あの子は自分でケリをつけたんです」
菓子を積みながら、話しだす亜希。

亜希「だからこんな手紙……見せられない……見せられるわけがない……あの子が二度、死んでしまう……！」

松永「……！」

○病院・精神科病棟・中

ぼんやりとベッドに座り、窓の外を見ている春子。様子を見に来た看護師が、
看護師「春子さん。何見てんの？」

春子「(笑顔) 外」

看護師「何も特別な景色じゃないでしょうに」
窓の外には、田んぼ、そして山の合間には、キラキラ光る小さな海が見える。

春子「お父ちゃん、子どもばっか撮ってたでしよう？子どもはすぐ動くから、自然を撮ってる方が楽しいって」

看護師「そう」

春子「それに自然は嘘をつかないって」

看護師「え？」

春子「子どもは恐いって。時々、笑顔で嘘をつくから。自分の子どもさえもわからなくなる時があるってお父ちゃんが」

看護師「……」

景色を見つめる春子。

だがその目は、キラキラと海の光を反射し、光り……。

○三部一裕樹 選挙事務所・中

万歳をしている三分一とスタッフら。

スタッフ「おめでとうございます！議員」

三分一「皆さまのお陰です。自分のようなわがままな男が生きてくれたのも、町の皆様のあたたかいご指導があったからです。これからは町のために一生懸命恩返ししたい、心からそう思っています」

わあっと拍手。

フラッシュがたかれる。

ファインダーを覗いてるのは松永。

三分一「松永！」

嬉しそうに駆け寄る三分一。

三分一「まさか記事にしてくれるのか？」

松永「ああ。けど外が暗くていまいちだ。思わずフラッシュをたいちまった」

三分一「どんどん撮ってくれ。嘘でも嬉しいぞ」

松永「生憎の雨だな」

窓に目をやる松永。

窓ガラスには雨が滴っている。

まるで全てものを掻き消すかのように。

三分一「いや、恵の雨だ」

松永「……」

ハツとする松永。何かを思い出したように目を開き……、

× × ×

フラッシュ。

中学校の卒業式。

家族の元に走っていく松永に向かって、
叫ぶ三分一。

三分一「え〜つまんね〜松永ちゃん！せつか
くの恵の雨なのにく〜？」

手には、『宏美』の卒業証書の筒――。

× × ×

松永「……眼鏡が必要、か……」

おかしそくに苦笑する松永。

三分一「松永？」

松永「――いや、思い出したんだ。中学の卒業式
を」

三分一「は。何だよそれ。ところでいつまでい
るんだ？」

松永「当分いる。今度こそ最後まで書くからな」

三分一「？そうか！じゃまた連絡くれ」

松永「ああ。必ず」

笑顔で有権者らの元に戻る三分一。

背を向ける松永。

携帯が鳴る。『デスク』から。

が、出ない松永。

薄暗い雲間から一筋の光が射しこむ。

それは微かだが、田んぼと小さな海、そ
して松永の目に確実に降りそそぎ――。

完